

底魚資源調査[※]

武田 保幸・阪本 俊雄

目 的

昭和60年度南西海区底魚資源調査要綱に基づく。

調査項目及び調査方法

1. 田辺湾小型底曳網の漁獲対象となっている小型エビ類の種組成ならびに体長組成を明らかにするために、1985年4～12月に月1回当該小型底曳網漁船に便乗し、漁獲物組成を代表するように約2kgの採集を行なった。
2. 同漁業の魚種別・月別の漁獲量と努力量（出漁隻数）は田辺漁協の水揚伝票集計結果から整理した。

結 果

採集標本中の種組成は資料13、小型エビ類の体長組成は資料14、魚種別・月別漁獲量及び出漁隻数は資料15のとおりである。

小型エビ類の種組成について経年的に整理すると図1のとおりで、1985年の種組成はサルエビ、トラエビ、アカエビが全体の約95%を占めこれら3種が主要な構成種になっている。ミナミアカエビは全体の約1%を占めるにすぎず、このことは入網時の観察によっても確認されている。ミナミアカエビは1977年に約50%であったのが年を経るごとに漸減し、1982年には激減している。これは1982年以降の傾向である。水温など環境の激変があったものとみられる（和歌山県漁海況情報第6報、1984年11月）。

次に小型エビ類各種の体長組成をみると（資料14）、8月に新エビが入網しはじめ、8月以降だいに生長している様子が窺える。トラエビの雌を例にとると、8月に体長組成モード4.5cmの新エビが出現し、12月には6.0cmに生長している。

近年の田辺湾小型底曳網の出漁隻数と主要エビ類漁獲量は図2のとおりで、本年の小型エビ類、クルマエビ類漁獲量は1983年、1984年よりも減少しているが平年並といえよう。なお、小型エビ類は紀州沖冷水塊が発生して以降、クルマエビ類では1980年以降それぞれ漁獲水準が一段高くなっている。後者は遠州灘冷水塊による近年の低温化（前述）が影響しているとみられる。

※漁業資源調査費による。本調査結果は昭和61年3月南西海区ブロック水産資源担当者会議において報告した。

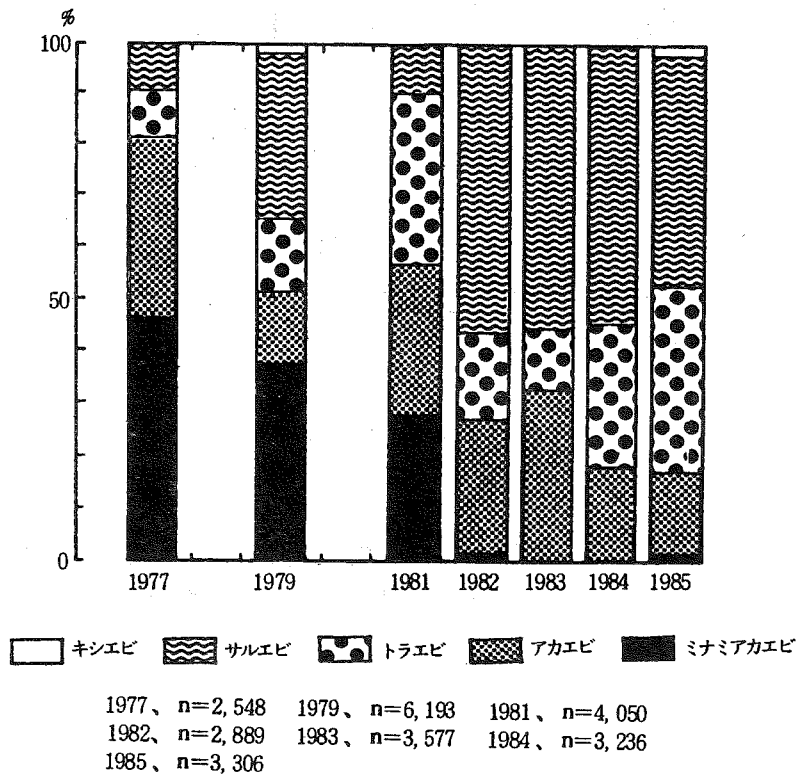


図1 田辺湾産小型エビ類の種組成

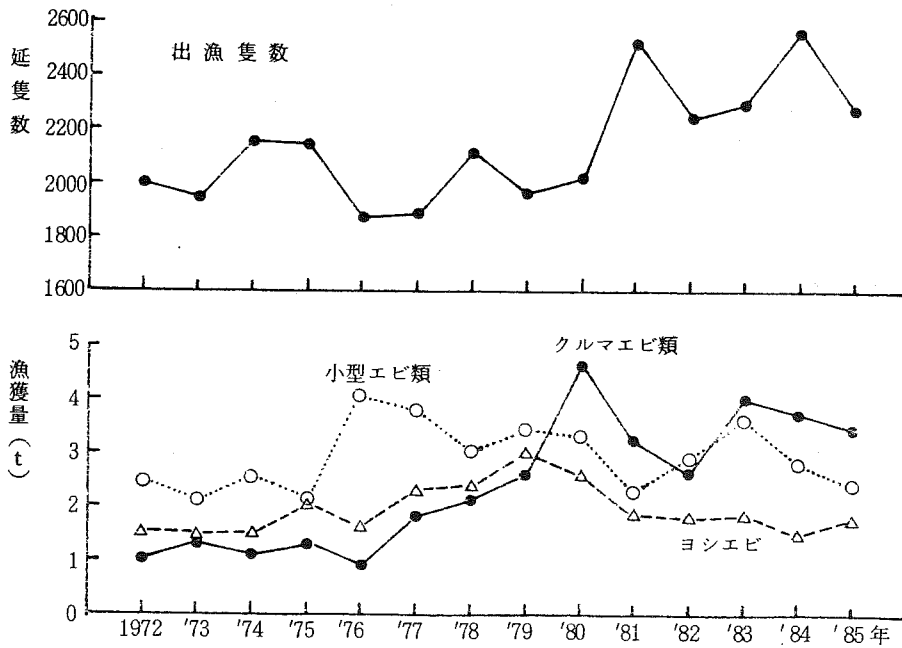


図2 田辺湾小型底曳網の延出漁隻数とエビ類の漁獲量